



日本美術と「ゆらぎ」について

第一生命経済研究所 特別顧問 山口 公生

明治の大家とうたわれた書家の作品を前にして、私はある現代の書家に「どこが見どころですか」と尋ねたことがある。出てきた答えは、「この線には、わずかに、ゆらぎが感じられるでしょう」であった。それから後、この「ゆらぎ」という言葉が気になって仕方がない。

ある陶芸家にも「作品にゆらぎがなければ、心に訴えるものがない」と言われた。

確かに、国宝になっている志野焼の茶碗「卯花塙」を見ても、その形の「いびつさ」に驚かされる。昔の中国官窯の青磁の均整の取れた姿とは大きな違いといわざるを得ない。桃山時代を背景に、作為を細部に施しつつ、全体として調和を保っていると評されている。

日本的な意味の、美術に見られる「ゆらぎ」とは何なのか、大変興味を引く問題ではないだろうか。美術鑑賞の上でも、日本という国を理解する意味でも。

ヨーロッパの有名な王宮にある庭園は概ね左右対称で権威と権力を象徴している。

これに対して、日本で有名な庭園は、自然をそのまま縮小し、写し取った形となっている。いわば変化そのもので、挙句の果てに水すら省略した枯山水や、借景すらある。まさに、「ゆらぎ」を演出しているという感じである。

作品の「ゆらぎ」と心の「ゆらぎ」との共鳴

美術品がいくら「ゆらい」でいても、それを見る側の心が共鳴して、ゆらがなければ、「よくわからない」で終わってしまう。現代作品について、多くの人が「難しくてよくわからない」というのもこの現象ではないか。この意味では、見る側の心理を考えてみる必要がある。

ゴッホの絵ですら、生存中は売れなかったという。「ゆらぎ」の表現が当時としては、大胆すぎたのかもしれない。現代では、ほとんどの人がそ

の絵に心響くものを感じている。

ある友人が「モディリアーニの絵のゆがんだ顔を見ていると描かれた女性が自分に話しかけてくるような錯覚にとらわれた」と言っていた。

では、どういう時に、人は「ゆらぎ」を感じるか。言い方を替えれば、感動するか。それは、美しさ、力強さ、激しさ、静けさ、などを感じることに他ならないが、案外、細部の隠れた部分の微妙な形や色を面白いと発見したとき、より一層、心の「ゆらぎ」を引き起こすときもある。この点から、作者のさりげない作為を見出すことが面白さを高めるコツともいえる。したがって、私がここで「ゆらぎ」として強調したいのは、微妙な変化あるいは「くずれ」といったものである。

しかし、時に、作者が意図的に作為で以って鑑賞者の心の「ゆらぎ」を掻き立てようとするところがある。この場合、作者の作為が「あざといもの」「下品なもの」に映ることもある。

そうならないためには、作者は偶然に任せるか、作為を加えず人間性のようなものが自然に表れてくるのを待つしかないが、それでは、芸術家を標榜する人は、何時、自分の思い通りの作品ができてくるかわからなくなる。

そこで、芸術家は表現したい意図を、わかる人にはそれとなくわかるように色や形にしのぼせる技術を駆使することとなる。聞くと、これが本当に難しいらしい。

一方、鑑賞する側にとっても、知識があれば理解の助けとなるだろうが、それが逆に感性を鈍らせることにもなりかねない。むしろ、多くのすばらしい美術品を見、わずかな「ゆらぎ」の感性を研ぎ澄ますことのほうが近道かもしれない。心をゆらがせる体験が多ければ、より「わかる」ことも可能となるのではないかと思う。

心の「ゆらぎ」の元は精神構造

日本人はどういうものに心の「ゆらぎ」を感じ易いか。この感性の問題は、難しい問題でとてもすべてを言い尽くすことはできないことを、承知の上で、その元となっているものを推察してみる。

ひとつは、宗教感覚が背景にあるのではないか。人生観と言ってもいいかもしれない。

日本人の深層心理の中にある、わが国に独特な歴史的経緯からくる宗教の重なり合いが、影響を及ぼしているように思われる。

古代からの神道は八百万の神を崇め自然崇拜の色を強く持ち、いまでもわが国民の心に深く根づいている。初詣やお宮参りは何の疑問を持たずに鬱蒼とした木々に囲まれた神社に行く。

こうした伝統から、自然を感じさせるものや、自然を想起させるものに心引かれることが多い。また、このため四季の変化に鋭い感覚を持つ国民性を得ることができたし、繊細でかすかな動きにも鋭敏になれた。

一方、六世紀にわが国に伝えられた仏教は、そのときすでに高度に発達した宗教であった。そのとき以来、伝えられ寺院を飾った数多くの美術品が精巧な技法ゆえに大衆の目を引き、信仰にも寄与したとされる。また、その後の国内における仏教の発展とともに、美術も大いなる進化を遂げた。たとえば、禅はわびさびの思想を生み出し、日本美術に独特の雰囲気と多様性をもたらしてきたのである。

この結果、器用さを活かした驚くべき緻密なものから、すべてを削ぎ落とした思索に満ちたものまで日本人の手になる種々なる美術品が出現することとなった。

もちろん、その後のキリスト教文化の影響も、怒涛のような西洋の文物の移入とともに、計り知れないものとなっていった。

日本における特徴は、こうした異なった宗教感覚が混然となり、また重層的にわれわれの美術を見る目を形作ってきたということではないだろうか。言い方を替えれば、それが、いろいろな見方を許容する素地をもたらしたといえよう。われわれ日本人は、いろんなものに心をゆらがせることのできる心の広がりを持っているといえる。

もうひとつは、教育の影響であろう。

子供の時に美術について、こうあるべきだ、という教育を受けた人は少なくないものと思う。きれいな色、整った形、まっすぐな線、などこれらが良い美術であると思い込んだ心は大人になっても容易に変わらない。

私の拙い、もの作りの経験においても、失敗した瞬間にすぐに手を出し修正しようとする。本当は失敗が意図せざるがゆえに、かえって面白い物に化ける可能性もあるのに、その芽を自ら摘み取る結果となる。この条件反射は如何ともし難い。

日本文化芸術の特徴は欠点を許すことだと、聞いた。芸術家は無理に欠点を自然な形で演出することに苦勞しているのに、欠点をうまく生かせない自分をおかしく思う。

ただ、こうした先入観や、固定概念を修正するには数多くの種類の美術品を見て、心をゆらがせることが大切だと思う。過去の教育の呪縛から開放されるにはこれしかないのではないか。

「ゆらぎ」の視点で鑑賞の軸を

私は仕事の大波にのまれつつ、その波間に顔を出したときに、ふと、こう思ったことがある。「ありがたいことに、人として生を受けたからには、残された時間、これまでの先人たちの偉大なる芸術文化をできるだけ味わって見たい」と。

しかし、芸術文化を味わうにせよ、今更どうしていいか見当がつかなかったのが、「ゆらぎ」(特に微妙なもの)という視点で美術品を見つめると、自分としては何か鑑賞の軸が生まれたような気がしてきたのも事実。

しかし、以上は私の思い付きで、しかも一部の芸術分野にしか焦点を当てていない。だから、これは何ら普遍的な考え方ではありません。でも、ご参考にしていただければと思います。

皆様も自分なりの独自の見方を発見されたら面白いと思いますし、人生がより豊かなものになるのではと考えます。また、人間的な幅も一層広がるかも知れません。